

相互訪問形式による世代間交流への取り組み

Approach to intergenerational exchange by mutual visit form

吉川 直人

Naoto YOSHIKAWA

青森中央短期大学

Aomori Chuo Junior College

Key words ; 世代間交流 相互訪問形式 施設間連携

I. はじめに

現在、少子高齢化の進行により、核家族化や、高齢世帯が増加しており、長寿化により、独居老人や介護問題をはじめ、高齢期の過ごし方が問題となっている。1) また、子どもについては、地域における世代間交流の機会が減少し、世代間交流による社会性の獲得の機会も減少している。2) 女性の高学歴化、共働き家庭の増加、地域コミュニティの子育てへの関わりの減少、貧困家庭の増加等により、親の育児不安が増大してきており、世代間交流が見直されている。3) 家庭で高齢者と接することが少なくなった子どもと、長い高齢期の過ごし方を模索する高齢者の、互いの社会的ニーズに対応することができるのが高齢者と子どもの世代間交流である。

本研究における世代間交流の定義は、草野 (2004) による「子ども、青年、中年世代・高齢者がお互いに自分たちの持っている能力や技術を出し合って、自分自身の向上と、自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを实践する活動で、一人ひとりが活動の主役になること」4) を用いる。なお、本研究の世代間交流ツールとして、紙芝居を選定した理由は、要介護高齢者が可能な活動として読み聞かせがあること、高齢者が児童に伝える手法として、有用なためである。参加高齢者は、固定ではなく、希望者も変わるため、メンバーが入れ替わると想定する。前提として、認知症状、心身の機能低下があっても、人前で会話や文章を読める状態のデイサービス利用者である。

II. 研究前の状況と課題

実践主体であるデイサービスは、数年来、近隣の保育園との交流を行ってきた。ただし、本実践までは、園児の慰問訪問を年数回単発で受け入れる形式であった。そのため、園児たちの歌や演劇を、利用者が受け身で見ると、高齢者と児童がなじみの関係にまで発展しない状況が見られた。また、利用者が、児童に伝えたい、教えたいと考えている、読み聞かせや昔遊びの実施というデマンドの充足は行えていない事も明らかとなった。

上記のような状況から、より質の高い世代間交流を実施するため、利用者が、児童施設に出向いて、紙芝居をツールの一つとして行う世代間交流プログラムを企画・実施することとした。高齢者と児童の結びつきを図り、高齢者の有する能力の活用を行い、社会貢献したいという要介護高齢者の一部が持つデマンドへのアプローチとして実施する。

Ⅲ. 先行研究

世代間交流の先行研究を概観する。土永ら（2005）は保育園児と高齢者の年齢を超えた交流が豊かな感性や社会性を育み、関係性に広がりをもたらすとしている。世代間交流を通じた適切な集団ケアによって十分な養護効果も期待できるとしている。しかし、一過性のイベント的なものではなく、日常的な活動として行われる必要も指摘している。5) 日下（2008）は、世代間交流は、他者との共存の中で自分存在価値を見出そうとする視点として、若い世代にとっては生きる力の習得という教育的効果であり、高齢者にとっては老いへの適応に向けてのパーソナリティ発達の促進をもたらすとしている。6) 築山ら（2007）は、世代間交流の実態調査により、年数回のイベント型交流が多いこと、世代間交流の計画は児童施設側が立てることが多いこと、子どもに対して高齢者が行うことは伝統遊びが多く、高齢者に対して子供が行う活動は、発表会やゲーム等が多いことを明らかにしている。7)

これらの報告により、異なる世代同士の関わりは、当事者双方に望ましい影響を及ぼし合うということが明らかにされている。また、高齢者施設への児童の慰問訪問的な交流が多い。7) そのため、要介護高齢者が児童施設に出向く形での交流が高齢者、児童、施設職員にもたらす影響については、研究することに意義がある。

Ⅳ. 倫理的配慮に関する事項

本実践研究を行うにあたり、ご本人、参加職員に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得た。本調査は、筆者が本学赴任前に実施した内容である。

Ⅴ. 実践内容

デイサービス事業所において、職員の紙芝居実演を利用者に対して数回行う。その際に、希望者をつのり、世代間交流のため、演者側として、児童に紙芝居を見せに行くことを提案する。実施場所として、児童センター、保育園を想定する。数名の利用者と職員で「おばあちゃん一座」との名目で紙芝居による世代間交流のため、児童施設を訪問する。児童施設からの訪問も受け入れ、馴染みの関係を熟成させる。頻度としては、月1回程度を想定する。

本実践研究の仮説として以下を設定した。

- ①世代間交流プログラムとしての紙芝居実演は、要介護高齢者の持つ社会貢献デマンドへのアプローチの手法の一つとして効果がある。
- ②高齢者施設、児童施設の利用者、園児が相互に出向く形式での世代間交流は、デイサービスを利用する高齢者に、地域における関わり方の必要性の再認識を促す効果がある。

対象者は、児童施設での読み聞かせを希望するデイサービス利用者であり、一回に3、4人のオープンメンバーである。実施時間は30分程度。準備、移動、片づけなど考慮すると、所要時間は1時間程度である。

利用者から、児童施設訪問の希望者をつのり、世代間交流のため、演者側として、児童に紙芝居を見せに行くことを提案する。実施場所は、保育園と児童センターである。付き添い職員は2名程度である。数名の利用者と職員で「おばあちゃん一座」として、紙芝居を用いた世代間交流のため、児童施設を訪問する。児童施設からの訪問も受け入れ、馴染みの関係を熟成させる。頻度としては、月1回程度である。

プログラムについては、利用者、児童施設、当事業所職員の意見を取り入れ、適宜変更する。また、毎回、実施後の反省会を設け、内容・日程など打ち合わせ、次のプログラムを決定する。

デイサービス事業所におけるプレ実施記録

2016年2月～4月に計8回行った。その中の一部を紹介する。

2月

参加利用者 12人

デイサービス（一般型）内で、職員の演じる紙芝居を観覧していただき、紙芝居実演後、世代間交流プログラムの趣旨を説明した。

紙芝居自体の物珍しさと、久しぶりに観覧した事から、反応が良く、終了後も楽しかったとの感想が多く聞かれた。自らが演者側に回る事については、この場では即答は無かった。だが、拒否反応も無かった。

3月

参加利用者 14人

デイサービス（一般型）内で、利用者Oさんに他利用者の前で紙芝居を実演して頂いた。

児童施設で行う前の予行演習として、要支援の利用者に、他利用者の前で紙芝居を実演して頂いた。終了後は、趣旨の説明を行った。その後、利用者2名から、賛同し、児童施設への訪問に参加したいとの声が聞かれた。

4月

参加利用者 11人

認知対応型デイサービスにおいて実施。利用者Aさん、Mさんに他利用者の前で紙芝居を実演して頂いた。

人前で読み聞かせを行った経験がないためか、緩急を付けない淡々とした読み方であったため、職員が、適宜相槌を入れフォローを行った。児童施設における実施時も、職員が適宜フォローする必要性を認識できた。

実施スケジュール

2016年5月～保育園、児童センターとの相互交流開始 相互の行き来を通して馴染みの関係を育成し、継続的（月一程度）の交流を想定する。プログラムについては、双方の意見を取り入れ、適宜変

更する。

実施記録

保育園

5月20日 園児達の訪問 利用者に対する合唱披露
5月27日 デイサービス利用者の訪問
プログラム 紙芝居 手遊び プレゼント 参加利用者 4人
6月8日 デイサービス利用者の訪問
プログラム 紙芝居 手遊び プレゼント 参加利用者 4人
6月15日 園児達の訪問 プレゼント
7月20日 園の運動会の応援 参加利用者 5人
9月10日 園児たちの訪問 折り紙の共同作成
10月20日 デイサービス利用者の訪問
プログラム 紙芝居 昔遊び リズム遊び 参加利用者 6人

児童センター

5月28日 児童センターへの訪問
プログラム 紙芝居 笑いヨガ プレゼント 参加利用者 4人

Ⅵ. 取り組みの結果

園児との交流を単発ではなく、月1回程度の継続的な世代間交流として位置づけたことにより、高齢者、児童間で馴染みの関係性が形成された。また、地域の中で役に立つ活動を行う意識により、受動的なプログラム参加ではなく、「次はこの部分を直すともっといい内容にできる」「こんなプレゼントは喜んでくれるかな」など活動内容、計画に対して、積極的な意識が生まれた。日常のプログラムにおいても、折り紙などの活動に対して、「子供達にプレゼントするために頑張っておこう」と意欲が高まった。

利用者から、「まだ自分にも出来るのがこんなにあった」「子供が喜んでくれるのが嬉しい」「子供達が喜ぶ事をしてあげたい」「まだまだ、人の役に立てるんだ」との声が聞かれた。

Ⅶ. まとめ

デイサービス利用者が児童施設に訪問する形式を用いた世代間交流により、利用者同士で世代間交流についての会話が増える等、一体感を感じる場面が多く見られるようになった。また、高齢者と児童の施設職員同士の交流による連携の意識が高まり、コミュニケーションの機会が増えた。

世代間交流プログラムは、継続的に実施し、利用者を受け入れられた活動として定着している。課題として、さらに発展させ、地域での認知度を上げ、内容の幅を広げて新たな個性を打ち出してゆく必要がある。

世代間交流を、施設内だけで完結するのではなく、地域との結びつきをつなげるため、利用者家族、児童保護者や地域と連携を図り、更なる発展に繋げる必要がある。デイサービスは、福祉資源と

して地域に貢献する役割を担っている。地域の福祉施設として、高齢者施設、児童施設など、他分野施設間での連携により、利用者間交流の活性化、職員間の連携をさらに強化する必要がある。

<引用・参考文献>

- (1)総務省統計局「統計からみた我が国の高齢者」<http://www.stat.go.jp/data/topics/topi900.htm>
- (2)厚生労働省「国民生活基礎調査結果の概要」平成26年 国民生活基礎調査の概況
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa14/index.html>
- (3)築山 崇 黒澤 祐介 草野 篤子 角間 陽子 (2007) 「世代間交流の実態調査報告：京都市・神戸市のアンケート調査より」福祉社会研究 7 123-129.
- (4)草野篤子 (2004) 「インタージェネレーションの歴史」現代のエスプリ (444) ,33-41.
- (5)土永 典明,岡崎 利治 (2005) 「世代間交流に関する調査研究：高齢者福祉関係施設を併設している保育所の側面から」九州保健福祉大学研究紀要 6 ,27-34.
- (6)日下 菜穂子 (2008) 「超高齢時代における世代間交流の意義 関西学研都市高齢者の世代間交流に関する調査から」同志社女子大学学術研究年報 59,69-78.
- (7)築山 崇 黒澤 祐介 草野 篤子 角間 陽子 (2007) 「世代間交流の実態調査報告：京都市・神戸市のアンケート調査より」福祉社会研究 7 ,123-129.
- (8)村山陽他 (2014) 高齢者における「世代間のふれ合いにともなう感情尺度」作成の試み：高齢者の心身の健康との関連,厚生学の指標 61 (13) , 1-8.

